

44	大分県立安心院高等学校外9校	27～30
----	----------------	-------

平成30年度研究開発自己評価書

I 研究開発の内容

1 教育課程

(1) 編成した教育課程の特徴

- ①教育課程について、小学校では生活科・総合的な学習の時間から時数を充てた。中学校では週2時間、年間70時間、高等学校では週1時間、年間35時間を設定し、総合的な学習の時間から時数を充てた。新教科「地球未来科」では、FAOの世界農業遺産に認定された本地域の自然（農業）、文化、歴史や、本地域の人々がリーダーとなって行っている国際的な「グリーンツーリズム」活動、地元の大学や宇佐市が主催した国際交流やボランティア活動および、「村おこし・町おこし」事業を教材として活用し、小学校段階から体験的・課題解決的に学ぶ。またその新教科を「学習軸」として、英語及び他の教科の学習内容と関連付けた教育課程を編成する。
- ②KEY STAGE 制を導入し、12年間の系統的な学びの教科となるように校種間のつながりを意識して12年間の区切り、評価規準を作成している。

	捉える (関わる) 力	解決する力	英語をツールとした コミュニケーション力
KEY STAGE 1 小1, 2年	○身近なひと・もの・ことに意欲的に目を向け、自分とのつながりに気づくことができる。	○くり返し試したり確かめたりしながら、気づいたことを言葉や絵で表して交流し合い、比べ合うことができる。	○色や生き物など学習と関係のある単語を歌やチャンツを通して楽しむことができる。 ○簡単な挨拶ができる。 ○遊びや学びの中にある素材をもとにALT等との交流を通して他国との違いに気づくことができる。
KEY STAGE 2 小3～5年	○身近なひと・もの・ことに主体的に関わり、新しい知識や価値を探ることができる。	○情報・資料収集した内容を、思考ツールを活用して整理分析し、調べたことを伝えたい相手に分かりやすく伝えたり、比較し合ったりすることができる。 ○活動を振り返り、素材を活用した新たな活動を想起・実行できる。	○家族や曜日など学習と関係のある単語を歌やチャンツ、ゲームを通して慣れ親しみながら使うことができる。 ○簡単なやりとりができる。 ○学校や地域のよさをALT等との交流を通して気づき、他国と自国の文化の相違点を知ることができる。
KEY STAGE 3 小6～中2	○身近なひと・もの・ことに関わりや他の地域との違いから、主体的に課題を発見できる。	○追究するために、情報・資料収集、資料活用をして分かりやすくまとめ、相手を考えて効果的に伝えたり、比較し合ったりすることができる。 ○活動を振り返り、新たな課題設定ができる。	○自分のことや地域の特徴や魅力を簡単な英語で伝えることができる。 ○国際的な情報をもとに、ALTや留学生等との交流を通して、多様な視点で考えていくことができる。
KEY STAGE 4 中3～高3	○世界の諸地域との比較や社会の変化に目を向け、地域の特性を考察することにより、地域の価値や課題を見つけ、主体的に社会参画できる。	○追究するために、情報を取捨選択し他者の意見や主張を評価したり、建設的に評価したりし、多面的なものの見方や考え方を身につけることができる。 ○活動を振り返り、国際的視野に立った問題の解決のために自分と地域、社会をつなげて考えることができる。	○留学生や観光客等との交流を通して簡単なQ&Aができる。 ○ALTや留学生等と国際的視野（柔軟で多面的な思考）で協働プランを実践できる。

(2) 教育課程の内容は適切であったか

12年間で4つのKEY STAGEで区切り、系統的な学びとなるよう、評価規準に加えて身に付けたい力一覧表を作成した【別紙1】。この一覧表は、児童生徒の発達段階に応じて身に付けさせたい力を表したものであり、地域に点在する学校間や異なる校種間での学習活動に一貫性や継続性をもたせることに効果があった。また、年間指導計画を作成する際には、他教科や行事との関連項目を設け、10校全体で「地球未来科」を中心としたカリキュラムマネジメントに取り組んだ【別紙2】。組織的に横断型・合教科型授業を実践し、学校全体から個人レベルの取組へと浸透させることができ、研究が進むにつれて「地球未来科」を異年齢集団での学習活動へ発展させる事例も確認された。「地球未来科」は地域の学校での連携教育における教育課程の柱としての役割を担い、本研究で育成したい児童生徒像に向けた包括的な教育活動として取り組むことができた。

(3) 授業時間等についての工夫

- ①「小学校段階の英語ツール」について、英語素地をつける目的で地球未来科のカリキュラム内に配当時間を設け、ALTや他校種の英語教師による乗り入れ授業を実施した。また、共通で使用する英単語については、質・量・地域との関連性を考慮し、小学校全校で活用しやすい方法を検討し実践した。
- ②全ての校種において修学旅行を活用し、「地球未来科」に伴う学習の場となる時間を確保した。
- ③高校教師による中学校への乗り入れ授業（英語・数学）を継続的に行い、英語をツールとしたコミュニケーション力の向上に役立てた。

2 指導方法・教材等

(1) 実施した指導方法の特徴

- ① 扱う題材や授業の形態等
KEY STAGE 1・2では季節や農産物など身の周りにある地域素材を題材とし、KEY STAGE 3ではグリーンツーリズム体験や他地域との交流・比較、KEY STAGE 4では外国人留学生を招いた地元ツアーガイドや幼稚園児・小学生向けのゲストティーチャー活動など、「地域から世界へ」と視野が広がるような体験的かつ課題解決的な学習活動を実施した。
- ② 思考ツールの活用
「地球未来科」では小学校段階から思考ツールを使い、学年が上がるにつれて児童生徒が自ら思考ツールを選択したり複合させたりする力を身に付けることを目標としている。
- ③ 評価方法
昨年度に引き続き、統一した様式のポートフォリオを集積したものを論述形式でまとめさせた。また、授業毎にルーブリック評価を実施した。

【KEY STAGE2】のルーブリック例

	学習活動	S	A	B	C
解決する力	院内の石橋のすごいところを考えよう。	院内の石橋のすごいところを、理由をつけたり、他の考えと合わせたり比べたりして、話すことができた。	院内の石橋のすごいところを、理由をつけて、話すことができた。	院内の石橋のすごいところを話すことができた。	院内の石橋のすごいところを話すことができなかった。

【KEY STAGE 1】 A(期待以上である) B(期待通りである) C(努力を要する)

【KEY STAGE 2～4】 S(期待以上であり+αがみられる) A(期待通りである)

B(おおむね期待通りである) C(努力を要する)

(2) 指導方法は適切であったか

研究が進むにつれて、各学校で扱う教材や学習内容は固定化されてきたが、それは緩やかで変更も可能なものである。取組内容は児童生徒の実態や興味に合わせて毎年見直しをして取り組むようにしてきた。しかし、興味がありそうだからと言うだけでは、児童生徒たちは主体的にはならない。本気で「解決したい」「もっと知りたい」「もう1回行ってみたい」と児童生徒たち自身が思うような工夫が必要であり、そのKEY STAGEごとの事例を以下に示す。また、最終年度から行っている異年齢集団によるゲストティーチャー活動では、児童生徒の「主体的態度」と「解決する力」の育成に効果的であることが、児童生徒のアンケートや授業中の見取りなどからわかってきた。12年間の出口にある高3生徒の進路意識にも変化が見られ、2017年度と2018年を比較すると具体的に地域社会への貢献を意識した進路を選択する生徒の増加がみられたことから、「地球未来科」を柱とした連携教育における指導方法は適切であったといえる。

【KEY STAGE 1】

年長さんとのふれあいをきっかけにして、お兄さんお姉さんになった自分たちが来年入学する年長さんたちを「お世話したい」する取組をした。自分たちが楽しむことから、年長さんを楽しませたいという相手を意識した課題により、目的意識が広がった(小1)。思考ツールの活用については、ウェビングでイメージを広げる「Xチャート」で仲間分けをする等の活動をした。視覚化されることでグループでの活発な話し合いはできたが、全体での交流場面では、飽きてしまうような児童も多かった。黒板を思考ツール代わりに、学級全体で比べたりつなげたりできるような工夫が必要である。

【KEY STAGE 2】

安心院の鰻絵について調べる中で、鰻絵の価値やそれを大切に守り広げていこうとする地域の人々の思いや願いを学ぶ一方、思ったほど鰻絵を見に来る観光客の数は多くなかったという事実を知り、愕然とした。そして、「何とかしたい」「安心院の自慢である鰻絵を広げたい」という切実感のある課題が生まれた。自分たちの思いと現実とのズレや隔たりを子どもたちが感じたときに、本気で「解決したい」と思うことが明らかになった(小4)。思考ツールの活用については、「比べる」「関連付ける」「多面的・多角的にみる」などの考える技を示すようにした。また、子どもたち自身の判断により思考ツールを選択・複合的に使う様子が確認でき、経験を重ねることによる思考力の深まりが見られた。引き続き、発達段階に合わせた思考ツールの活用を継続していきたい。

【KEY STAGE 3】

『安心院の未来予想図を作ろう』という単元を設定し、地域に住む人たちの思いや願いを調べていった。年代別にわけてアンケートをとり、中学生がこれからの安心院町に期待していることと、大人や高齢者が期待していることを比較検討することで論理的に思考し、より具体的で実現可能な提言へ繋げることができた(中1)。

【KEY STAGE 4】

外国人向けに行われる「ゴールデンツアー」では、事前に生徒が考案した地元ツアーを留学生へプレゼンテーションし、修正改善を加える。ツアーガイド実施後、報告会をすることで学年全員による振り返りの時間を確保した。ツアー現場では事前に準備したことを使いながら状況に応じて解決する姿や、実践の積み重ねにより生徒に自信が付き、それが主体的態度やコミュニケーション力の育成に繋がる様子が確認できた(高2)。

II 実施の効果

1 児童・生徒への効果

① 児童生徒の自己評価について

ルーブリック評価による児童生徒の自己評価を集計した。概要は以下のとおりであり、単元の前後で「捉える力」や「解決する力」が向上したと考える児童生徒は増加していることから、連携校で扱う教材や単元設定は妥当であったといえる。学年末や単元末には蓄積されたポートフォリオを整理しながら、根拠を明確に自分が学んだことや成長したことを論述させるようにした。こ

うした積み重ねが論理的思考力の育成につながると考えられる。

【自己評価の概要】

目的：連携校での研究であることを踏まえて、児童生徒の自己評価から、指導方法の効果や妥当性を検証・整理し、評価規準の共通理解を得るとともに学習指導計画に活用するため。

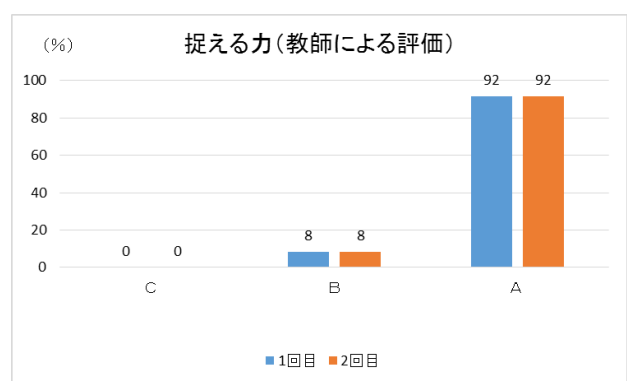
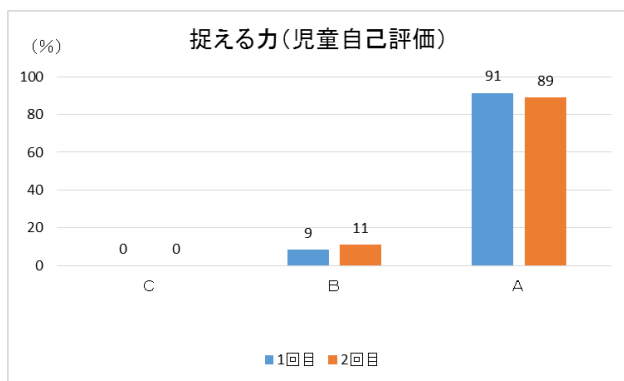
実施時期：6月～11月 2回実施

対象：連携校の児童生徒

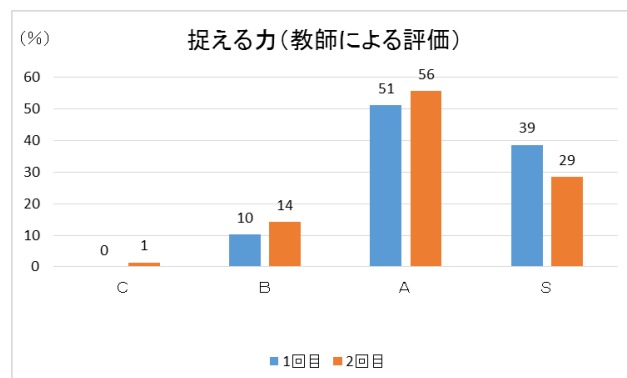
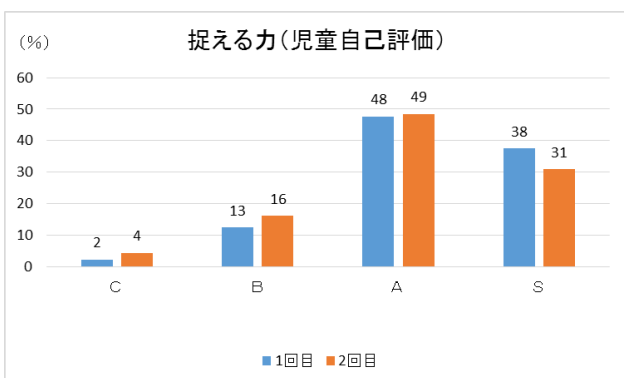
実施方法：1) 生徒は授業終了時にポートフォリオへ自己評価を記入する。
2) 各校の学習活動における単元のはじめを1回目、単元の終わりを2回目として自己評価を集計する。

評価項目： 「捉える力」, 「解決する力」

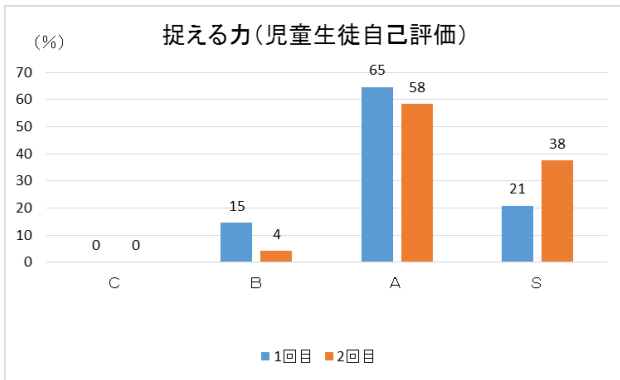
【捉える力 KEY STAGE 1】



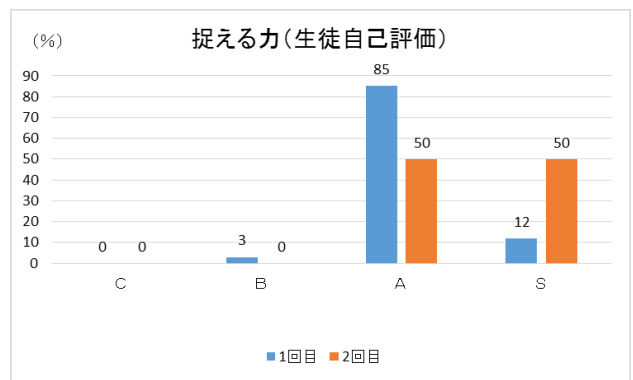
【捉える力 KEY STAGE 2】



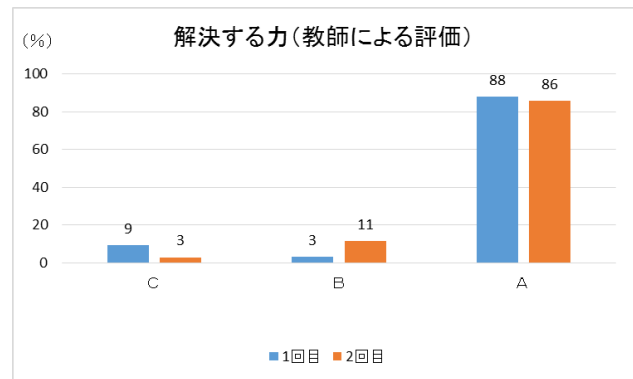
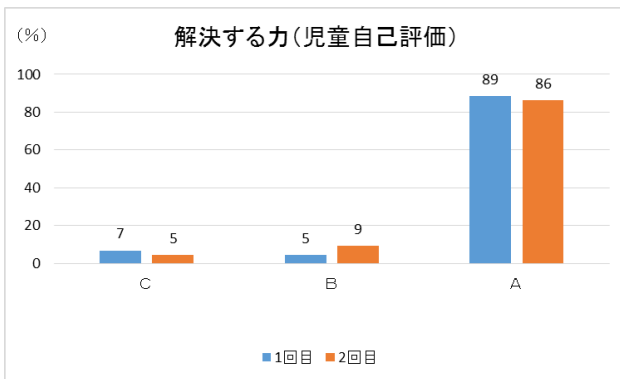
【捉える力 KEY STAGE 3】



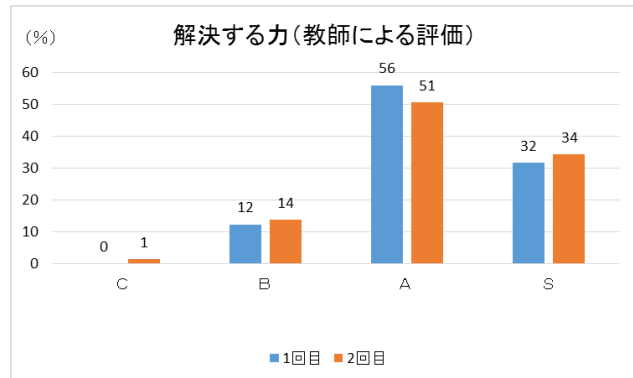
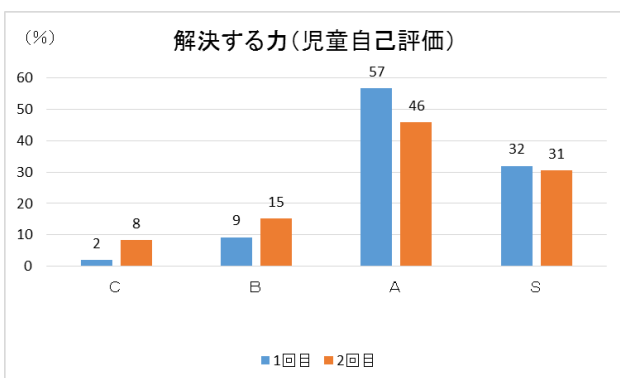
【捉える力 KEY STAGE 4】



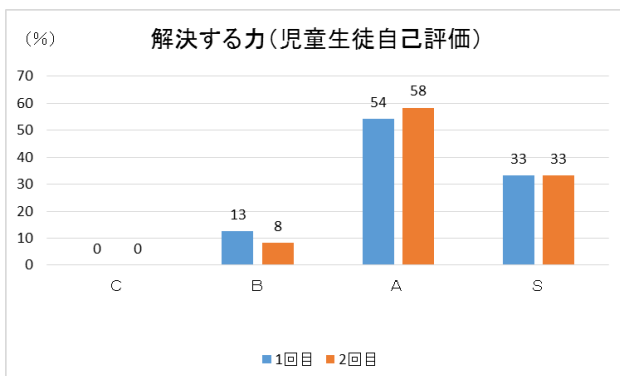
【解決する力 KEY STAGE 1】



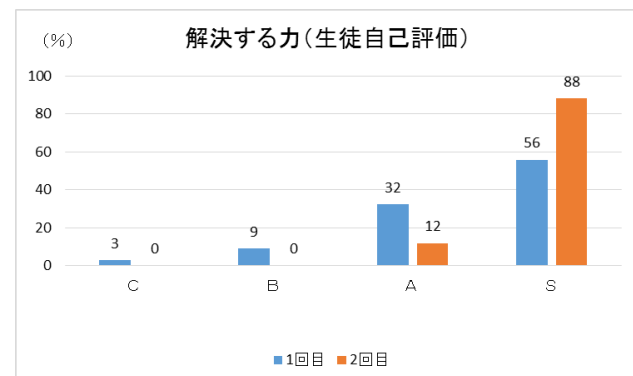
【解決する力 KEY STAGE 2】



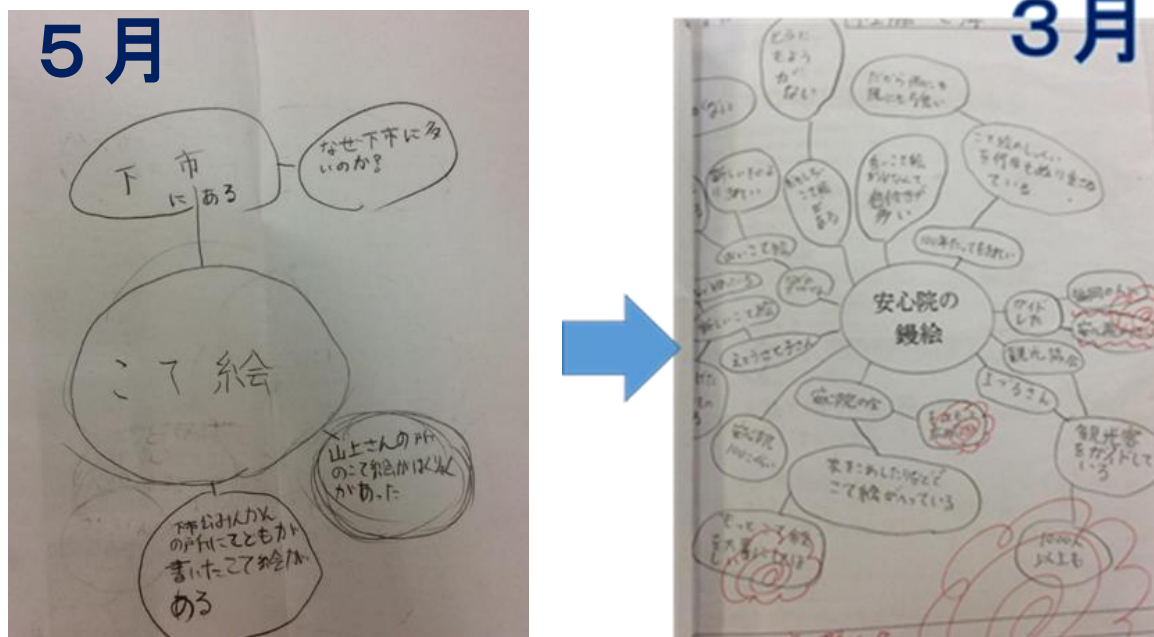
【解決する力 KEY STAGE 3】



【解決する力 KEY STAGE 4】



- ② 思考ツールとポートフォリオの活用について
 ポートフォリオを整理しながら5月のウェビングと学年末3月のウェビングをビフォーアフターの視点で比べると、鏝絵のよさ、町や人の良さについての多くのことを学んだことが分かる。



2 教師への効果

- ① 「地球未来科」を中心とした教科横断型授業への取組を、教科担当制である高校においてスクールプランに掲げたことで、個人レベルでの授業改善に繋げることができた。
- ② 「地球未来科」に関する小中高合同研修会を開くことで、連携校職員全体で俯瞰的な視点に立った教育活動をイメージすることができ、校種の隔たりを超えるような異年齢集団における学習活動の展開に繋げることができた。
- ③ 研究が進むに連れて、県外にある地域の連携教育に取り組む学校と交流を深めることができた。これにより中学校では他地域との比較により批判的思考力を育成するような教材開発に取り組むことができたり、高校では全国でどのような連携教育が実践されているかを「知る」きっかけになった。今後地域の連携教育について他の事例を「知ること」から「意見交換や議論」にまで発展させるための段階を踏むことができた。
- ④ 高校では新学習指導要領にあるように各教科に探究科目が設定され、科目内で探究活動や合教科型授業の展開を完結させることも可能となる。そのため、総合的な探究の時間をどのように扱うかについては、学校間で異なり幅も広がることが予想される。総合的な学習の時間を充てている「地球未来科」では教育活動の視点が学校内での展開にとどまらず、連携した枠組みの中にあり、より幅のある深い学びに繋がる。このような視点に教科担当制色の強い高校現場の教員が触れることは新学習指導要領のもとでの探究活動や総合的な探究の時間を考える礎となる。

3 保護者への効果

小中高の職員の参加体制を整え、各小学校区で地区懇談会を開いたり、地球未来科の授業で地域の方による出前授業や取材などを生徒と共に活動する場面を多く設定した。また、安心院・院内地域は高齢化率44%の高齢過疎地域であり児童生徒数は減少しているが、地域外からの安心院高校への進学希望者が増加しており入学定員を大きく下回ることではない。これは本地域の教育活動が地域から地域外へ認知されている成果といえる。

Ⅲ 研究実施上の問題と今後の課題

1 組織の改善

① KEY STAGEをつなぐ取組について

KEY STAGE が当初の目標設定に対して十分に機能していないことが挙げられる。連携教育は地域に点在する小学校間及び中学校間の横の連携を踏まえた上で、縦の連携が可能となる。そのため小中高合同研修会や校種別部会を設定し組織的な取組を進めてきた。結果として、入口のはっきりしている小学校と出口の見える高校では「身につけたいカー一覧」に沿って目指す児童生徒像が明確化し、単元計画も軌道に乗ってきているが、KEY STAGEをつなぐ中学校では模索が続き、中学校同士の横の連携がとれるようになったのが最終年度であった。ポートフォリオの形式や評価方法をそろえるなどの統一した取組はできているが、KEY STAGE 3における継続的かつ連続性のある成果がまだ見えない。来年度より KEY STAGE 4において4年間通した単元設定が可能になるが、同様に KEY STAGE 3で中学校が要となり横と縦の足並みがそろった時に、次の段階として KEY STAGE が生きてくると考えられる。

② 連携校と連携教育の捉え方

連携校として設置された学校は、その地域における連携教育の在り方について共通認識を持ち、教育活動に取り組む必要がある。特に、地域のコーディネーター等が配置されておらず、学校現場が主体となる本地域では、各学校のリーダーである管理職の共通認識は「地球未来科」を柱とした教育活動の推進に必然であり、適切な助言により各校の研究や連携教育が深まる。そのため、次年度から実践部会に校長間の意識統一と研修を目的とした校長部会を設定する。組織的な取組を定着させることは、諸条件が変化しても持続性のある教育活動に繋がる。

2 教科に関する課題

① KEY STAGE の区切りについて

地球未来科は各教科との関連が欠かせない教科であるが、本研究では校種の繋ぎを優先したため KEY STAGE 2 と KEY STAGE 3 の区切りと、各教科の目標の区切りが一致していない。小学校5、6年は同じ KEY STAGE にするなど、カリキュラム全体を見通した KEY STAGE の区切りを再検討する。

② 「英語をツールとしたコミュニケーション力」の位置づけについて

新学習指導要領により小学校英語が教科で設定され、地球未来科での英語ツールとの差異が不明瞭になり「英語をツールとしたコミュニケーション力」の位置づけを見直すことが挙げられる。

③ 異年齢集団における学習の場について

最終年度に取り組み始めた異年齢集団によるゲストティーチャー活動は、児童生徒の「学びに向かう力」「解決する力」の育成に効果的であることがわかった。小中高教科部会の設定など組織的に取り組むような体制を作り、双方向からの視点を取り入れた学習活動を実践できれば、「地球未来科」がより連携教育としての柱となり地域の学校の連携教育の教育課程を有機的に展開することができる。

④ 児童生徒の見とりについて

小学校の教員はポートフォリオの集積から、児童一人一人の活動の様子を読み取り、適切に次の学習へ活かしたり、コメントを記入している。KEY STAGE 4でも生徒の自己評価に対して教員がコメントをするようなしなかけを設け実践したが、評価の妥当性を共有したり、確認したりするまでには至っていない。中学校・高校の探究活動を適切に評価したり、その評価の妥当性をアドバイスできるような人材は希であり、小中高合同研修会の場を充実させるよりも、異年齢集団での双方向からの視点を取り入れた学習活動を実践するにあたり意見交流をする方が直接的であり、効果も高いと考えられる。

【別紙1】身に付けたい力一覧表

地球未来科目目標		地域の課題や地球規模の課題についての、課題解決的、体験的な学習を通して、生きようとする児童生徒の資質能力を次のように育成する。				
		(A)「国際的視野で地域を捉える力」・・・地域のひと・もの・ことに関わったり、地域と世界とを比べた (B)「地域の課題を国際的視野で解決する(工夫する)力」・・・地域の課題を設定し、必要な情報を収集し、必要な情報を発信する。 (C)「英語をツールとしたコミュニケーション力」・・・自他の違いに気づき、相手に適切に伝えたり相手と協働する。				
段階		小1	小2	小3	小4	小5
		KEY STAGE 1		KEY STAGE 2		
視点		身近な体験を通して学ぶ導入期			表現方法や気づきの基礎を作る育成期	
つけた力・視点		自分と身の周り			身近な地域	
つけた力・視点		具体的につけたい力～何が得意か				
A 捉える(関わる)力	1	関心・意欲	・具体的に身近なひと・もの・ことに関わる活動に進んで関わり、自分と社会や自然とのかかわりに関心をもつ。		・「？」を意識して身近なひと・ものことと主体的に関わり、相手意識・目的意識を持ちながら、自分なりに工夫して繰り返し活動する。	
		生活に生かす・主体的	・自分と身近なひと・もの・ことに関心を持って、意欲的に生活や学習をする。		・自分と地域社会とのつながりに気づき、地域に役立つ活動をする。	
	2	協働	・自分たちの良さを活かして活動する。		・友だちと力を合わせ協働する楽しさを味わい、その良さに気づく。	
		他者理解(国際的視野(の芽生え))	・友だちの存在やよき、周りの人の支えに気づく。		・他者の良さを知り、外国の人を含めて相手の立場に立って考えることができる。	
	3	自己理解	振り返り(自分自身)	・集団生活に馴染み、集団における自分自身の存在に気付く。 ・自分自身の成長に気付く。		・振り返りを通して、自分のよさやできること、成長したこと、自分らしさに気付く。
	4	課題の捉え 事実的知識・概念		・自分と身近な人々、社会及び自然に親しみの気持ちや愛着をもつ。 ・自分の周りには何があるのかを知り、それと自分のかかわりを理解する。		・地域には何があるのか、地域の特徴・新しい価値を見つける。 ・地域の暮らしやそこで生活する人たちの思いや願いを知り、連携協力して実現しようとしていることを知る。
B 解決する力	1	課題発見・課題設定 であう・みつける (願いを持つ)		・対象との出会いや具体的な活動や体験をとおして、自分の思いや願いをもつ。		・生活や学習の中の疑問や驚きから問題に気づいたり、自分たちが暮らす地に目を向け、経験や既習事項と関連させて考え、課題を作る。
	2	情報収集	(活動する)	・家族や地域の人に聞いたり、資料を集めたりする。 ・図書室の本などから見つける。 ・見る、聞く、触れる、作る、探す、育てる、遊ぶなどして、直接働きかける。		・目的に応じた対象を決めて、自分たちの身近なところから資料や情報を集める。 ・聞き取りやアンケートで情報を集める。 ・パンフレットやインターネットなどから情報を集める。 ・大切なところにアンダーラインを引く。 ・必要な情報を選んで、メモや写真などの情報を記録を残す。
	3	整理・分析 スキル	(感じる考える)	・ウェビングなどの簡単な思考ツールや、比べる・分ける・つなげる・たとえるなどの考える技を使って考える。 ・生活上必要な習慣や技能を身に付ける。		・視点を明確にして 比較、分類、関連づけなどの思考スキルを使い、適切な思考ツールを活用して考える。 ・情報を比較・分類するなど、探究の過程に応じた思考スキル・思考ツールを身に付ける。
	4	まとめ 表現	(表現する・行為する)	・言葉、絵、動作、劇化などによって表現する。 ・相手を意識して、(楽しめるように)働きかける。 ・活動を通して気付いたことや楽しかったことなどを、順序よく相手を意識して話す。		・観察や聞き取りなどで調べたことを自分なりにまとめたり表やグラフを使って整理して表す。 ・他者の考えを尊重しながら、自分の考えをまとめ、他者にわかりやすく発信する。 ・相手や目的に応じて、多様な方法で表現しようとする。 ・組み立てを考え、中心をはっきりさせて発表する。
		振り返り(学習方法や内容)		・体験や活動を振り返り、次の活動に活かす。		・友だちとともに視点を明確にして活動を振り返り、次の活動に生かす。
		コミュニケーション(スキル)		・活動を通して気付いたことや楽しかったことなどを、順序よく相手を意識して話す。		・相手や目的に応じて、多様な方法で表現しようとする。 ・組み立てを考え、中心をはっきりさせて発表する。
C 英語をツールとした コミュニケーション力	1	表現 コミュニケーション	(KEY STAGE 1, 2) 慣れ親しみ (KEY STAGE 3, 4) speaking writing プレゼンテーション	・配当単語を使った学習活動(歌やチャンツ・ゲームなど)を通して楽しむ。 ・簡単なあいさつができる。		・配当単語を使った学習活動(歌やチャンツ・ゲーム)などを通して楽しむ。 ・(I like ~, What do you ~?)などの簡単な表現を使って、やり取りができる。 ・学校や地域の良さを(I like ~, This is ~)などの英語活動等で学習した簡単な表現方法で伝えようとする。
	2	国際的視野		・ALTとの交流を通して、外国の遊びと日本の遊びの似ているところや違いを感じながら楽しむ。 ・ALT等との交流を通して、外国との違いや似ているところを見つけたり、地域や自国の文化に親しみを感ずる。		

社会の諸問題に関わろうとする意欲をもち、論理的思考とコミュニケーション力を駆使し、グローバル社会を主体的に

儿ながら視野を広げ、多様な情報の中から、地域のよさや課題を見つけることができる。
 集・選択・活用しながら解決の方向性を導き出し、自他の役割を考えながら協力して主体的に行動できる。
 ・の言葉を適切に理解したりすることにより、言語や国籍を超えて人間関係を築いたり、国際的視野で思考したりすることができる。

小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3
KEY STAGE3			KEY STAGE4			
学ぶ方法や探究的な態度を育成する充実期			論理的思考力・表現力・課題解決力を育成する発展期			
身近な地域と他の地域			世界の中の両院			
<p>どのようになるか(地球未来科で目指す各段階での具体的児童生徒の姿)</p>						
<ul style="list-style-type: none"> 身近なひと・もの・ことと広い視野で向き合い、課題意識を持って自分なりの工夫をしながら繰り返し活動し、解決のために積極的に取り組もうとする。 			<ul style="list-style-type: none"> 世界の中の両院の視点から、設定した課題を解決するための方法を工夫し、主体的、積極的に課題解決のために考えたり、社会参画したりしようとする。 			
<ul style="list-style-type: none"> 活動内容を自分なりに広げたり、深めたりしながら、他者や地域社会とともに学んだことを実践していこうとする。 			<ul style="list-style-type: none"> 世界の中の両院の視点を持って広い視野で身近な問題と向き合い、解決策を発信し、実社会の問題解決に取り組む。(社会参画) 			
<ul style="list-style-type: none"> 友だちや地域の人・関係機関と力を合わせて協働する大切さに気づき、問題の解決に向けての取り組みを成し遂げる喜びを感じる。 			<ul style="list-style-type: none"> グループや地域の人、関係機関等とつながりを深め、協力して課題解決のための案を練ったり、積極的に活動したりする。 			
<ul style="list-style-type: none"> 他者の良さを認め、外国の人を含めて異なる他者を受け入れながらとらえ直せることができる。 			<ul style="list-style-type: none"> 他者の良さや違いを認め伝え合ったり、活動を通して出会った外国の文化や習慣の違い等を尊重したりすることができる。 			
<ul style="list-style-type: none"> 振り返りを通して、自分の特徴や可能性に気づき、それを発揮するとともに将来の生き方につなごうとする。 			<ul style="list-style-type: none"> 振り返りを通して身についた力を自覚することで、自分の可能性に気づき、進路選択等将来の生き方につなごうとする。 			
<ul style="list-style-type: none"> 地域の自然・文化・産業等の価値を価値を探るとともに、他地域との違いから、解決すべき課題を見つける。 地域の課題を解決・克服するために様々な人が関わり活動していること、他地域と関わりながら価値を高めていこうとしていることを知る。 			<ul style="list-style-type: none"> 世界の諸地域との比較や社会の変化に目を向け、地域の特性を考察することにより、地域の価値や解決すべき課題を見つける。 地域の自然・文化・産業等には限りがあり、課題解決のために様々な人がビジョンを描いて維持・継続・更新のために努力していることを知る。 			
<ul style="list-style-type: none"> 自分たちを取り巻く社会に目を向け、経験や既習事項と関連させたり、多面的に見つめたりして考え、課題をつくる。 			<ul style="list-style-type: none"> 自分たちを取り巻く社会に広く目を向けて、対象を多面的に捉え、活動の意図や目的を明確にしたりして課題を設定できる。(既知の課題ではないか、社会や地域的に意義があるか、自分たちの興味関心や探究したい課題か) 			
<ul style="list-style-type: none"> 目的に応じた対象を決めて、目的に応じた方法で効果的・効率的に資料を集める。(アンケート、インタビュー、実験、観察、実地調査など) 他者の意見や課題解決の方向性から、必要な情報を取捨選択する。 			<ul style="list-style-type: none"> 説明する、共同作業を行うなど直接的な関わりを持つ。 仮説立てと検証の目的を持って、情報収集の計画を立て、実験、観察、実地調査、アンケート、インタビューなどを行う。 客観的なデータが得られる方法を選択し、活動や発表の強い論拠となるようにする。 			
<ul style="list-style-type: none"> 視点を明確にして、他の情報と比較したり体験したことと資料を効果的に関連づけたりして考え、社会・経済などの視点から、多面的・総合的に考える。 			<ul style="list-style-type: none"> 量的な情報を、適切に整理・分析・加工し、相手に分かりやすい見せ方の工夫をする。 社会、経済、国際交流などの視点から複雑に絡み合っている情報を、多面的総合的に整理して考える。 			
<ul style="list-style-type: none"> 情報を比較・分類・関連付ける・多面的に見るなど、探究の過程に応じた技能を身に付ける。(思考ツールの選択活用→独自の思考ツールや表→思考ツールなどで考える) 			<ul style="list-style-type: none"> 情報を取捨選択し、他者の意見や主張を建設的に評価したり、多面的なものの見方考え方を身につける。(探究の過程に応じた適切な思考ツールを活用したり、創造したりして、情報を整理する。→思考ツールなどで考える) 			
<ul style="list-style-type: none"> 活動の過程や結果、成果などを学んだことを使って、工夫しながらわかりやすく整理して表す。 他者の考えを尊重しながら、自分の考えをまとめ、他者にわかりやすく発信する。 			<ul style="list-style-type: none"> ツアーや協働プランなど実践的な場面を想定し企画するとともに、効果的に実行する。 地域や関係機関・関係者等他者から得た情報や考えを考慮しながら、学んだことの結果・提言など自分の考えをまとめ、発信する。 			
<ul style="list-style-type: none"> 相手や目的に応じて、効果的な方法を選択して、表現しようとする。 資料等を効果的に使ったり、比喩などの表現方法等を交えたりしながら、意図を明確にして発表する。 			<ul style="list-style-type: none"> 相手や目的・意図に応じ、効果的に表現し、相手の理解を得ることができるようにする。 資料を効果的に使ったり、比喩などの表現技法を適切に交えたりしながら、より相手に伝わりやすい話ができるようにする。 			
<p>イラスト、ポスター、新聞、フリップボード、レポート、HP、討論会、スピーチ、プレゼンテーション、パネルディスカッション、ポスターセッション、ツアー など</p>						
<ul style="list-style-type: none"> 次の活動を意識して、成果や課題をもとに観点を明確にして学習の仕方や活動を振り返り、次の学習に活かす。 			<ul style="list-style-type: none"> 振り返りの中で明らかになったことを論拠として、国際的視野に立った問題の解決のために自分と地域、社会をつなげて考えることができる。 			
<ul style="list-style-type: none"> 相手や目的に応じて、効果的な方法を選択して、表現しようとする。 資料等を効果的に使ったり、比喩などの表現方法等を交えたりしながら、意図を明確にして発表する。 			<ul style="list-style-type: none"> 相手や目的・意図に応じ、効果的に表現し、相手の理解を得ることができるようにする。 資料を効果的に使ったり、比喩などの表現技法を適切に交えたりしながら、より相手に伝わりやすい話ができるようにする。 			
<ul style="list-style-type: none"> 教科で学習した英語表現を使って、簡単な日本語を英語に言い換えてみる。 地域の情報(特徴や魅力)や自分の意見をまとめた英語で表現し、伝えることができる。 英語での質問に答えたり、相手に質問したりする。 			<ul style="list-style-type: none"> 既習内容を活用しながら表現方法を考え、伝えることができる。 ALTや留学生等と国際的視野(柔軟で多面的な思考)で協働プランを実践できる。 留学生や観光客との交流を通して、簡単なQ&Aができる。 			
<ul style="list-style-type: none"> ALT等との交流を通して得た国際的な情報をもとに多様な視野を持って考えることができる。 			<ul style="list-style-type: none"> 留学生等との交流を通して、文化や習慣、考え方の違いを尊重し、寛容な態度と広い視野で考えることができる。 			

